

「多文化共生」を未来につなぐために

～「つどい」からふたたび～

兵庫県外国人県民共生会議座長 竹沢 泰子
(京都大学人文科学研究所教授)



獅子舞が観客の頭を噛む度に沸き起こる明るい笑い声。澄みきった青空のもと、神戸中華同文学校の運動場は、まだあどけない顔の生徒たちから白髪混じりの熟年組まで、国際色豊かな人たちで賑わいました。「つどい」はこうして、前向きに歩こうとする神戸の街と人々を象徴するかのように、明るく温かい雰囲気に包まれながらスタートしました。

防災のバケツリレーでは、息の合った連携ぶりが発揮され、各国料理の温かい炊き出しは、私たちの空腹を満たしてくれました。体育館で行われた成人式では、目の前の頼もしい若者たちの姿に20年の時の流れを重ねて胸を熱くした人も多かったことでしょう。午後からは、気仙沼からゲストを招いて、二つの震災での被災外国人をめぐる状況と課題について活発なパネルディスカッションが行われました。「国際こども音楽祭」で子どもたちが披露した音楽や踊りは、言語の違いを越えて人々の心をつなぐ芸術の力を再認識させてくれました。廊下には、震災当時のすさまじい被害状況の写真や、人々が互いに助け合うほのぼのとした写真が展示され、大勢の人が熱心に見入っていました。まさに五感で堪能できたイベントでした。

悲しみや悔しさのつまった阪神・淡路大震災でしたが、私たちが得た宝の一つは、文化的背景にかかわらず、同じ人間として助け合い、励まし合うことから生まれた「きずな」です。「多文化共生」という言葉は、阪神・淡路大震災後にこうした活動を通して全国に広まったのです。

今回の「つどい」の実行委員会の母体となる「兵庫県外国人県民共生会議」では、毎年、知事を交えて、外国人県民が同じ地域住民としてより快適に安心して暮らせるよう、活発な意見が交されています。それらは、直接的間接的な形で県の多文化共生施策につながっています。

参加団体の一つである兵庫県外国人学校協議会の会長と神戸中華同文学校の理事長を長く務められた故・林同春さんが、華僑・華人や在日コリアンなど外国の文化背景を持つ人々にとって最も大切にしているものは、民族教育だといつも口にされていました。子どもたちが、自分のルーツの言語や文化を誇りとし、それによって社会貢献や世界貢献ができると実感できる社会環境、多数派の日本人がそれを尊重し、社会にも大きなプラスであると歓迎する社会環境が求められます。

今年から毎年、震災を知らない「成人」が増えていきます。20年前のあの多文化共生の精神を忘れることなく、また未来へとつなぐためには何をすればよいのか、この節目の年とともに考えたいものです。